

ちばを知り、ちばをつくる

—「千葉学」振興のために—



千葉大学の地域連携事業

千葉大学生涯学習担当副理事
普遍教育センター副センター長

山田 賢

シリーズ「千葉学ブックレット」

研 究

千葉大学の「千葉学」

教 育

実 践

普遍科目「地域をつくる」

地域観光創造センター
地域連携事業支援

千葉大学普遍教育・教養展開科目群「地域をつくる」



教 育

- ・地域を知る・地域とかかわる
- ・文化をつくる
- ・アートをつくる
- ・**伝統文化をつくる**
- ・展示をつくる
- ・千葉学ー自然環境と農学ー
- ・スポーツマネジメント

など24科目開講(2010年度)

伝統文化をつくる

県民参加型で「ちば」にちなんだ創作狂言を上演している千葉県文化振興財団と協働し、台本制作から小道具の準備、上演まですべての過程に学生が参加しています。



今年度は11月13日、青葉の森文化ホールにて「水戸黄門と藪しらず」を上演しました。

「伝統文化をつくる」 教室での授業風景



プロの狂言師を講師にお迎えして、台本を練り上げ、衣装や小道具を考えていきます。

いよいよ上演が近づいてきました。



現地(芸術文化ホール控え室)にて衣装合わせをします。

芸術文化ホールの能舞台にてリハーサルを行います。



受講学生も市民やプロの狂言師に混じって舞台を踏みます。

上演当日を迎えました。



受付・ホールの展示パネル・配布物の作成、すべて学生が分担します。

地域観光創造センター・地域連携事業支援



実践

- ・子供による住環境ワークショップ
ー穴川地区におけるまちの模型づくりー
- ・千葉市栄町アーケード記念企画
- ・市民参加による街路空間の彩りと賑わいの創出実践
- ・ちば造形教育広場
- ・学校、地域、美術館、大学の連携
による学校余裕教室の活用事業

など12事業(2010年度)

2009年度、2010年度 穴川まちづくりプロジェクト

工学研究科 北原理雄研究室

穴川地区は、学生街であることも起因して、住民の入れ替わりが激しい地域です。加えて、多くの子供が居るにもかかわらず、成人になると街から出て暮らす傾向が高いため、まちづくりを担う若い人材が育っていません。

そこで、穴川の魅力を学生達が実際に肌で感じ、子供たちと一緒にまちの将来を考える活動を2009年度から実施しています。

2009年度活動 未来の穴川商店街模型づくり

子供たちとまち探検に出発。



気づいたことを発表
していきます。





← 穴川商店街の将来像を
模型に表現しました。

プレゼンテーションを行って
模型を展示します。





2010年度活動

子供たちと穴川のお祭りに
参加しました。(10月3日)

まずは設営のお手伝い
から開始！





子供たちが担う神輿
のサポートをしました。



まちを「歩く」ことで子
供たちはまちをもっとよ
く知っていきます。

シリーズ「千葉学ブックレット」



研 究

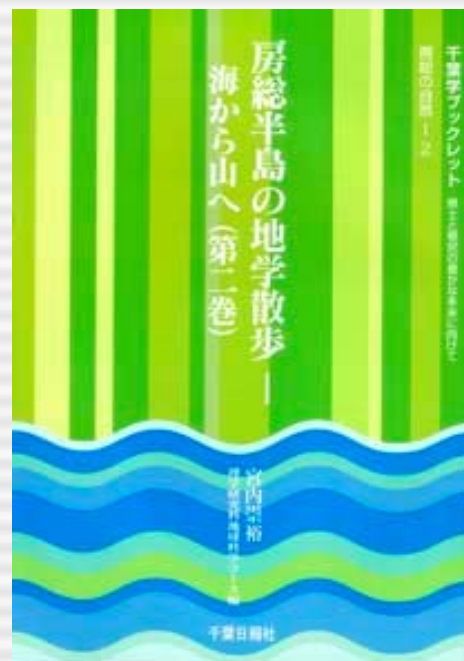
シリーズ 房総の自然
シリーズ 千葉の教育と文化
シリーズ 千葉の政治経済
シリーズ 房総の歴史と文化
シリーズ 千葉の健康
シリーズ 都市と農業
シリーズ 都市と自然環境

千葉日報社より刊行 既刊18冊

千葉学ブックレット刊行の目的

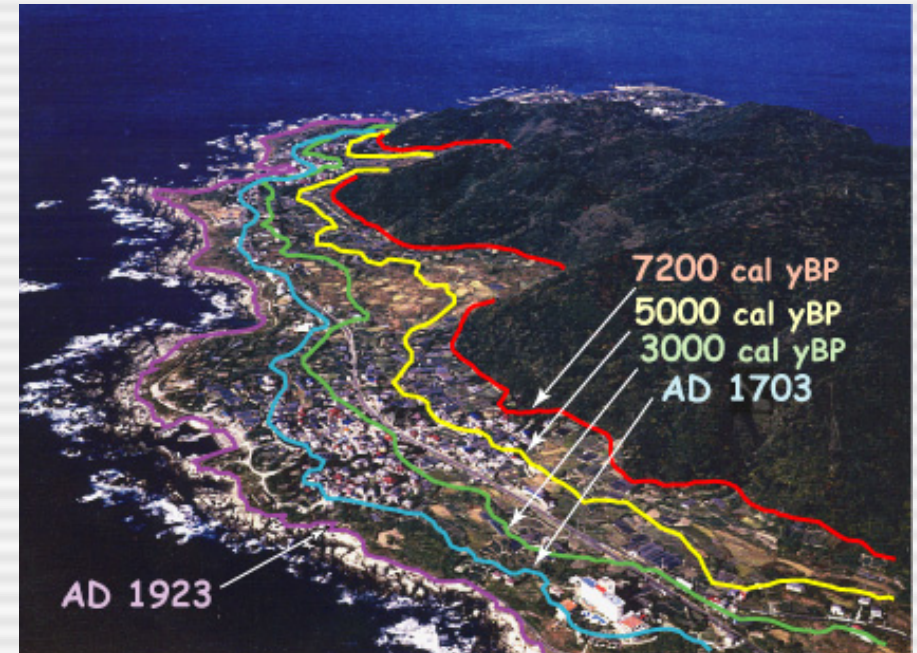
- 共に千葉に目を向け、もっと千葉を知り、県土と県民生活の課題と未来の可能性を考えること
- 地域に目を向けることによって、学問の新しい展開と創造をはかること

「発刊に当たって」より



シリーズ 房総の自然より

宮内崇裕・理学研究科地球科学コース編『房総半島の地学散歩』



房総半島の生い立ち、将来、そして房総の調査から分かる古地震、古海洋について地球科学の立場から語ります。

シリーズ 房総の歴史と文化より

見城悌治『近代の千葉と中国留学生たち』



明治末、千葉医専では中国(当時は清)からの留学生が数多く学んでいました。1911年、辛亥革命が起こると彼らは救援のため母国へ向かいました。その時の千葉医専の師友たちと留学生の交流を軸に、歴史学の立場から千葉の近代史を描きます。

シリーズ 都市と自然環境より

小林達明・古賀陽子『ミツバツツジはささやく』



房総半島の代表的な花の一つ、ミツバツツジのたどった運命をもとに、房総における人と自然とのかかわりの歴史的変遷を、環境生態学の立場から考えます。

シリーズ 千葉の健康より

池上文雄『千葉県の薬草Ⅰ』、『千葉県の薬草Ⅱ』



カギカズラ



ハマボウフウ

豊かな房総の自然に育まれた千葉の薬草について紹介します。薬学の知見に基づき、薬草とくすりの歴史を通して、房総の植物から健康を考えます。

「ちばを知り、ちばをつくる」ために

